

## デイベートについて考える

藤田 祐一

はじめに

九十六年度若手ゼミの世話人たちにとってデイベート&ディスカッションは頭痛の種だった。そもそも実施の可否すらが問題となっていたが、前回でのこの企画の著しい不評も、その場の一部の参加者が醸し出した雰囲気になされたものが大方であろうという推測と、またデイベート&ディスカッションを若手ゼミで行うことの意義について議論を重ね、確認したうえで、続行が決定されてはいた。そこで年内にはテーマを絞り込み、年が明けてから担当者探しとなったわけだが、引き受けてくれる人がほとんど見つからないという有様であった。その事態は前年度での不評を確かに反映していたかも知れない。期限も迫り、実質的に

この企画の実施もほぼ不可能に近くなってきた。こういった事情から世話人会では再びこの企画の問題とせざるを得なくなっただけでなく、実施の都合上、代わりの企画をたて、何らかの形でこの空白を埋めなくてはならないという事態に陥ったのである。世話人会での話し合いの結果、我々はデイベートの、更にこれを若手ゼミで行うことのは是非を今一度参加者全員に問うてみることに、これを企画とすることを考案した。苦肉の策でもある。が、少数の世話人のみによつて廃止を決定する（それはいとも容易だが）よりも、むしろその意義の有無を今一度若手ゼミの場で問い、そこで存続の是非を決めるべきではないだろうか。そこで試みられたのが今回の企画である。

## 一 デイベート&ディスカッションの開始

デイベート&ディスカッションは二年前に初めて行われた（それまではテーマ別分科会が行われていた）。つまり開始して間もない企画である。進行は先ず、ひとつのテーマについて肯定否定側に分かれ、それぞれが二分ずつ三回の弁論を行う。最終的に多数決を採り、一応勝敗を決めたうえでフロアとのディスカッションに入る。一見簡単そうだが、こうした手順に適ったテーマの選定は非常に難しいものである。主張の対立が成立し得るテーマでなければ意味がない、がまたそれだけに鋭い対立が予想されるような、特にアクチュアルな問題を考える上で有効な方法と言えるだろう。

若手ゼミにおいてデイベートを企画した理由を、発起人の土屋氏は三つ挙げている<sup>(1)</sup>。ここでそれを要約させてもらおうと、第一に参加者の議論の活性化、第二に参加者の調査研究の促進（かつてのシンポジウムがもっていたグループ学習の効果を新企画によって復活させる）、第三に哲学がそもそもデイベートの性格（対話法Ⅱ弁証法）をもつという事実を鑑みて、今日の哲学界が余りに権威

主義的かつ相互検証の営みを欠いていることへの反省、である。これら三項目のいずれとも、当然のことながら参加者の積極的な対話の姿勢を前提としている。因みに第一回目（一昨年）のテーマは『自由と規範―積極的安楽死を認めるべきか』、昨年度はシンポジウムがフェミニズムだったこともあり『自由意志による売春は是か非か』であった。どちらも今日のかつ深刻なテーマに正面から取り組んだ意欲的な企画と言える。が何故この企画が大方の不評を被り、早くも存続が危ぶまれることになったのか。

## 二 デイベート反対者の意見

ところで、この企画には当初から反対意見が少なくなかったという。第一回目の実施前における、この企画に対するアンケート回答中、賛成は十六通、反対が七通、無回答一通であった<sup>(2)</sup>。反対理由として例えば元世話人代表の水野氏は、始めから『わりふられた』立場を固定してしまうのは哲学にはふさわしくない、と述べ、また更に「もつともこれは私がそもそもデイベート嫌いだからで

すけれど。」と付言している<sup>(3)</sup>。土屋氏はそれに答えて、この新企画が意義あるものとなるために、相応しい論題設定を行う他、方法上の工夫をすることを提案している。そうしたやりとりを踏まえたうえで、若手ゼミにおける第一回デイベート&ディスカッションは実施された。

しかし翌年（報告者が若手ゼミに参加したのはこの年からだが）、この企画は早くもその意義を問題とされることになる。また、九十六年度若手ゼミの世話人である我々は、先述の通り担当者捜しの時点で難航を強いられることになった。因みにテーマはアンケート回答により、『ハイデガーのナチ負担』『生命技術』などを候補としていた。報告者が実際に何人かの人に頼んだ際のほぼ共通の反応として記憶しているのは、先ず多少の違いこそあれ概ねデイベートに対する嫌悪感である。そのうちどれだけの人が実際に行つたないしは見たことがあるかは別として、ともあれデイベートはなほだ悪いイメージを被っているようである。我々は勝敗が問題ではないこと、メインはむしろフロアとのディスカッションにあることなどを強調したが、それだけでこのイメージを払拭するこ

とは適わなかったようである。第二に、また哲学的問題をこのような形で扱うのは意味がない、という反応であった。たとえば一部のハイデガー研究者にとつてはこうしたデリケートな問題が立場をはっきり是非に分けて、しかも勝敗をつけるような形で論じられることは、それがどのような意図からのものであろうと首肯しかねることのようだ。そして、このどちらもが前述の水野氏の反対意見に見られることから、とりあえずこの二点がデイベート反対意見にほぼ共通のものと考えてよいだろう。

### 三 当日

これが今回このような企画を試みることとなった経緯である。当初は報告者と小屋敷氏がそれぞれ、何度かの世話人会で皆で散々話し合った内容をまとめて、十分ずつ肯定論と否定論を論じ、残りの時間をディスカッションにあてる形を採ることを考えていた。しかし当日思いがけないことに、この企画の発起人である土屋氏が駆けつけて下さり、世話人代表の松本氏を含めた四人で話し合い、

また氏から様々なアドヴァイスを頂くことができた。そこでの結果、デイベート食わず嫌いの人が殆どの中で、その是非を論じてもらうよりも、唐突ではあるが、試みに氏が授業で行っているような形式のデイベートを一度フロアも含めてやってみようということになった。そこで土屋氏の司会によって以下の事が行われた。先ずフロアの全員がデイベート賛成派と反対派に分かれ、それぞれ自分の立場とは逆に、デイベート賛成派は反対の理由を、デイベート反対派は賛成の理由を挙げていってもらおう。次に挙げられた相手側の論拠を（つまりデイベート賛成派は相手側の賛成の理由を、反対派は相手の反対の理由を）それぞれ論駁していく。報告者の見た限りでは、これはそれなりの興味をもって参加してもらえたように思えた。この後でのディスカッションでは、デイベートおよびこれを若手ゼミで行うことの是非について、活発な意見交換がなされた。例えば森氏は、我々が普段の研究生生活においてもつねに、反論を想定しながら思考していること、また独断的思考に陥らないためにもそれは望ましく、そしてデイベートとはその訓練の場としての意義をもつことを述

べている。

## 結び

以上、この企画の開始からこれまでの経緯、この企画の意義と、それに対して当初よりある反応、反対意見について簡潔にまとめてきた。最後に、これらを踏まえた上で一応、報告者個人の意見を述べておきたい。先ず、単に先入見に基づいた否定や拒否によって、この企画が廃止されるのならば、それははなはだ独断的な思考と怠惰によって、ひとつの（このゼミを盛りたてようという意欲をもった）企画が挫折させられたことになってしまおうだろう。それは決して若手ゼミの精神に沿うものとは言えない（そもそもそこどころのレヴェルの問題ではない）。しかしこの企画を続けていく際に、デイベート反対派の意見（例えば勝敗をつけることへの反対など）に対する何らの考慮ないし対策もなくこれを退けたとしても、例えばこの企画が存続されたところで、いずれまた似たような状況が生まれてくるに違いない。終了後のアンケートで、この企画については「形を変えて継続」が

圧倒的多数だったことから、この点について考慮することが不可欠となつてくると思われる。こうした反省点を踏まえたうえで、これからもこの企画が（どのような形をとるにせよ）若手ゼミでの活発な議論の場として継続されれば幸いである。

## 註

- (1) 土屋貴志「デイベート&ディスカッションはいかにして若手ゼミで行われたか」(『哲学の探究』第二十二号所収)、五七、五八頁。
- (2) 前掲書、五九頁。
- (3) 同前。

(ふじたゆういち 法政大学)